

●展評

1983年7月

戸川馨、平戸貢児 など若い作家たちについて

千葉成夫

わたしはこの展評でなるべく若い作家たちを取上げたいと考えてきた。それも個々の作家・作品についてのみでなく、いちばん若い層の作家たちに共通してみとめられる本質的な特徴の、すくなくとも幾つかについて指摘しておきたいと考えてきたが、ちょうど今月（7月）は若い作家たちの発表が目立ったこともあり、そのうちのひとつについて記しておきたい。発表順に例をあげるなら——大橋弘磁（パレルゴンII、6/27-7/2）、山本タクト（駒井画廊、6/27-7/3）、佐藤久（田村画廊、6/27-7/3）、小野完次（Studio 4 F、6/27-7/2）、大島友二・小林良寿・吉澤美香3人展（真木画廊、6/27-7/3）、吉田洋子（ギャラリー手、4-16）、平戸貢児（パレルゴンII、4-9）、岩本元（田村画廊、4-10）、戸川馨（Gアートギャラリー、11-16）、久保裕（Studio 4 F、18-23）などである。

ただし、いま挙げたのはあくまでもサンプルとしてである。いいかえれば必ずしもすべてが秀れた、水準に達した例というのではなく、なかには「ニュー・ウェイヴ」の無惨なまがいものもあれば、発表以前ないし学生のレポート程度の水準のものもあるといったようにいろいろと、質だけ

を基準に展評をきびしく書くとしたらとてもではないが評価以前というほかはないものも含まれている。余談だが、ガキがどんな安易な発表をしようか当方にはそれに干渉する気も暇もない。観る者としてはどんなものでも注意を傾けて見せてもらうが、同時に、評価する者としてはガキを甘やかすなどもってのほかだとかんがえる。教訓など垂れないが、最も唾棄すべきは同伴者面をした大人だという真理ぐらい、ガキにも判るだろうとおもう。むろん、これは本当はガキだけのことにかぎらない。

本題に入って こうした若手作家（作家予備軍）の発表に接して近頃おもうのは、感性のかなり根源的な変貌ということである。若いから異質の感性をもっているなどということではない。そんなことはいつの時代にもあったことで如何ほどのことでもないか、そうではなく、変貌というよりは彼らにあっては感性が崩壊にさらされているのではないのか？そして、崩壊を自覚していない、自覚できない、つまり崩壊とおもわずにいるのではないのか？ 繰返しているが彼らはまだ作家予備軍であるにすぎないのだから、人様にお見せできるような代物でない作品を指して感性の崩壊もへちまもないではないか、という意見にも一理はある。だが、それを十二分に承知したうえで、なおわたしは最も若い層の作家たちはいまかなり深刻な感性の崩壊に直面しているような気がしてならないのである。



戸川馨



平戸貢児

わたしのかんがえでは、この感性の崩壊の原因は、わりあいはっきりしているようにおもわれる。すなわち、大きくいってふたつの要因がある。ひとつは、現代日本の美術は1970年代初頭くらいまでにすべての幻想がくずれさるとともにその虚構性があらわになりはつきりいえばそれ以降やっとなじり、はじめて固有の文脈をふまえた「美術」を形成してゆこうとしてきているのだとすれば、要するに我々はまだ「美術」を有っていないのと等しい状態にあるわけだから、既成の美術概念そのものが崩壊して当然だということである。もうひとつは、日本の社会そのものが、やはり10年くらいの間に大きく変わってきて、とくにここ5年ほどをみているとある種の地すべりにも比せられる変動を蒙りはじめているが、そのことが我々の意識に深い打撃を与えつつあるということがあげられる。つまり社会の超近代化、高度（ないし超）資本主義化が我々の生活と意識と感性そのものを大きく動かしはじめているという事実である。従って若手作家は、一方でどこから「美術」を始めたらいのか皆目わからず（彼らの責任は彼らが概して現代日本の美術の歴史について無知であるところにあり、我々批評家の責任は彼らにそれについての明確な議論を提示しないことにある）、ために自分自身の日常卑近な場処に手をのばしてみたり、流行といわれている「ニュー・ウェイヴ風」にかぶれてみたりする（だから日本の若手のものは、欧米のニュー・ウェイヴでもなんでも

ない）。しかし他方で同時に、時代そのものの大きな変動につきうごかされ、その感性の命じる方向に否応なく身を投入しようとしているのだ。

むろんわたしは、若手作家のこうした現状をまったく否定すべきだなどとは全然かんがえていない。とくに原因の后者は我々のすべても逃れられはしないとすれば、彼らがいちはやく体現してしまっているというにすぎない。ただ、彼らが持続を果してゆくうちに自己の足元を、歴史がそれをつくってきていることを自覚し、その自覚を自分の制作のなかに取込んでほしいと願うだけだ。

それでもなお、つまり我々につづいて彼らもこの自覚を手中にして、そうやってかかってもなお、いま時代を襲いつつある大きな崩壊の波には抗しえないかもしれないとしても、である。もちろん、もちたくともオプティミズムなどもちえないのと同じように、我々にはもはやベシミズムは要らないだろうが……。